

電鉄の今昔

執筆 宮田 栄門

第四回

昭和十一年、県庁前と東関屋間に小型電車が走る

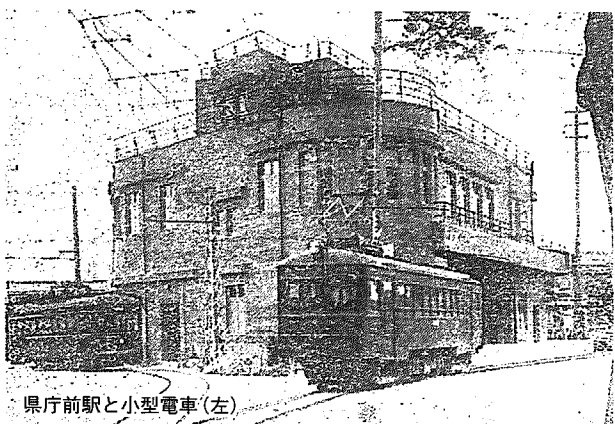
(先月号からの続き)
昭和八年四月一日、東関屋―白根間(十七・一キロ)を開通した新潟電鉄は、沿線住民の期待と喜びのうちに同年七月二十八日、県庁前―東関屋間(二・六キロ)を開通し、同年八月十五日、白根―燕間(十六・一キロ)を開通し、ここに新潟市県庁前駅から西蒲原駅まで三十五・八キロの全線を開通、営業を開始した。

昭和八年九月五日、東関屋―燕間貨物営業開始 新大野停留所のこと

そんな中、不自由さを感じたのは、大野の一番上町内の新町の人たちだった。前記の理由で、新大野のはずれに越後大野駅ができたため、駅まで行くのに二十分近くもかかり、年寄りや病人は尚更大変だった。早速、新町の人たちが中心になって停留所の誘致運動を起した。これには岡田さんの陰の力もあって、開通から一年遅れた昭和九年六月十五日に新大野停留所はつくられた。

昭和九年八月一日、東関屋―県庁前間貨物営業開始

こうして、新潟―燕間の電車の運行は始められたが、新潟電鉄の経営状態はいっ



県庁前駅と小型電車(左)

うに芳しくなかった。このことについて岡田さんは、「電車はできたが利用するお客が少なかった。これは昔の人はよく歩いたから」と言っており、今では考えられないが大野から新潟や白根あたりへ行くのに、電車があったらほとんど、歩いて行く人が多かったと言っている。

昭和十二年十一月二十二日、越後山王停留所が営業開始(昭和十五年十月一日「七種」と改名、現在味方村)

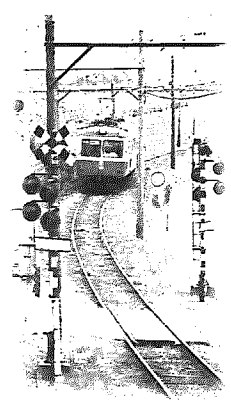
昭和十六年十二月八日、太平洋戦争が始まると、新潟市やその周辺の軍需産業が一段とさかになり、乗り物の需要は大幅に増えた。しかし、戦争でガソリンの供給が無いため、バスの大半がもくもくと煙を出して走る木炭車となり、スピードも出ず馬力も弱く、急な坂道を乗客が降りてバスの後押しをしたなどという、うそのような話も伝えられる。そんなことから時間通りに走る電車の需要が大幅にのびたが、しかし、時勢がら電気の消費量もかなり制限され電鉄も苦しい運営が強いられた。

昭和十八年十二月、国策による旅客運輸事業の統合が行われ、新潟電鉄株式会社は新潟合同自動車株式会社と合併し、今の新潟交通株式会社となり、取締役社長はあの有名な中野四郎氏となった。

電車の需要は終戦後も順調に伸び、岡田さんは、「このころ電車は順調に走ったのでお客さんも多く、バスとの合併が悔やまれるほどだった。ところが、戦争が終わって世の中が平穏にもどるとバス輸送も正常化し、マイカーが増え、バス輸送も減少し、昭和四十年後半のころから電車の赤字に赤字に転落し、ついにバスのお荷物になってしまった」と言っている。

戦時中や戦後のことは記録がないため分からないが、昭和三十五年は一年間四百九十七万七千人、昭和三十八年は六百二十九万九千人と最高を示し、昭和四十年が五百五十一万五千人と、このころから次第に下降線をたどり、昭和四十七年には四百九十五万五千人と、五百万を割り、昭和五十二年には三百八十一万六千人と激しく輸送人員数が下降している。

(続く)



のは、昭和十二年、日支事変が始まって軍需景気が起り、新潟鉄工所や軽金属などの軍需工場へ多くの人が通うようになったところからである。当時、ラッシュ時には三両連結でも乗り切れないほどで、経営状態は一度に好転した。

話はさかのぼり昭和八年、電鉄開通以後の沿線の駅、停留所等の増設状況や、電鉄の移り変わりをひらいてみる。

昭和九年の新大野停留所開設については前に記したが、同じ年の十月二十日、曲駅が営業を開始。(曲駅は現月潟村)

新潟に豆電車が走る 新潟新聞昭和十一年四月一日記事 モダン新潟に又、誇りの種!!豆電車!!の出現

新潟電鉄では、かねて新潟県庁前に新築中の県庁前駅が竣工し四月一日からいよいよ移転事務開始することになり、同時に同駅、東関屋間に小型電車を運転することになった。三階建てモダン式建物白亜の県庁と相映発するところに真に近代式都市新潟を発揮し確かに新潟市の一美観を加えた新潟電鉄が新潟、燕間を連絡して同地方一帯の交通運輸に多大の貢献をもたらしている上、この新駅舎の新築とともに小型電車を運転し白山浦、関屋一帯の交通に非常の便益を与えることになった。

軽快な「我等の足」運転回数もグンと増加
小型電車は県庁前、東関屋両駅間だけ運

町立図書館

問い合わせ ☎377-5300

開館時間
平日 午前9時～午後6時
土・日 午前9時～午後5時

10月の休館日
6日(月)、10日(金)、13日(月)、
16日(木)、20日(月)、27日(月)

〈絵本の読み聞かせ〉
毎週水曜日午前10時30分から

今月の新刊本



今月の新刊(一部)

神々の山嶺 上・下
夢枕 獏 著
集英社

深町が、カトマンドウの街で買った古いカメラは、登山家マロリーの失踪というヒミツを解く鍵を写していたはずだった…。男たちの壮大なドラマを追った山岳小説。

この國のなくしもの
野坂 昭如 著
PHP研究所

昭和20年8月15日、日本人は思考を停止した。神戸の小学生惨殺事件、援助交際、従軍慰安婦、金融不祥事、オウム、大震災…。様々な事件、災害が起こっている今、「平和」と「民主主義」の結末を問う。

アレキサンドリア
曾野 綾子 著
文芸春秋

聖書の「シラ書」を読みとき、古代都市アレキサンドリアの物語と現代の私たちの日常風景とを結び、家族、友、愛、死など様々なテーマを描き出す24編の掌編小説集。迷ったとき、人生の友となる。

遺骨
内田 康夫 著
角川書店

製薬会社社員が、死の直前に預けた骨壺。それを持ち去った謎の女。錯綜する事件の接点は、金子山にあり…。県仙崎にあり…。の尊厳と倫理の回復をう長編推理。